

書籍流通 予測データ使い効率化

出版3社と丸紅

出版大手3社と丸紅が出資する「Pubtex（パブテックス）」は15日、書籍の流通を最適化する事業を始めると発表した。まず株主の出版3社と、書店6社が枠組みに参画する。

新事業では、需要予測のデータを有効活用。そのうえで、書店から追加注文があった書籍を丸紅のノウハウを活用して書籍以外の荷物と一緒に運ぶ。必要な時に必要な分だけ本を送れるため、品切れや返品を減らせる仕組みだという。

現在、書籍の物流は書籍のみを扱う専門の仕組みが主流で、トラックを満載にできないなど効率性が課題となっている。流通コストを抑えるねらいもある。

パブテックスは講談社、小学館、集英社と丸紅が出資して設立。販売データや生成AIを活用し、書店の需要を予測するサービスなどを展開してきた。（岩沢志気、堀越理菜）

他の荷物と 必要な時に届ける

新事業のねらいなどをパブテックスの渡辺順社長に尋ねた。

――事業の目的は。

「業界の返品率を削減して売り上げを拡大するためです。これまでデータを活用する事業の取り組みを進めてきました。しかし、最終的にデータ上の最適解は出せても、実際にその通りにモノが動かなければ成果は出せませんでした。そこで、データと実際のモノの動きを連携させる試みを始めることにしました」

――データだけでは返品率が下がらなかったのはどうしてですか。

「これまでの仕組みでは、書店がデータに基づいた発注をしても、それ



出版流通に必要な「三つの要素」とは。インタビュー詳細はこちらのQRコードから

がいつ届くか分かりませんでした。また、発注した冊数のすべてが供給されるかも分かりません。いつ来るか分からないし、全てが来るかも分からないけれど、出版社に本を返品できるから、多めに注文して、余ったら返そう――。それが出版業界の現状なんですよね」

「いつ届くか分からないのに品切れを防ぐことは難しい。一般物流を使っている、いつ届くかを明確にすることが、重要だと考えています。業界全体の行動変容を通して、返品、品切れを減らし、出版社側に原資が生じる。その原資をインフラの整備や新たな仕組みの開発に振り向けることで、業界に還元されていくサイクルをめざします」



パブテックスの渡辺順社長
14日、東京都港区